

『遠き故郷、郷愁』

故郷が遠ざかる。流れる景色に手を振り電車で揺られここを後にする。

私が新しい住処に選んだのは和州郡山、かつての城下町である。

電車から降り新天地の土を踏むと私は驚嘆した。

そこでは先程別れた故郷が私を出迎えてくれた。

褐色のオブラートで包まれた石垣が織りなすホーム、

駅前で売られるコロケの香り、車などない頃から存在する狭隘道、

それに従い並ぶ様々な時代の商店、旧家。

間違いなく私が故郷に残した友そのものである。

私は彼と出会い、抱擁を交わすことで

この地に対し親近感を覚え、安堵を感じることができた。

しかしこの新しく、懐かしい友との別れの時も近いらしい。

話によるとこの駅近傍には再開発計画があるそうだ。

それが実現すると町の様子も大きく変わるのだろうか。

この光景も過去のものとなりいつか我々の記憶の底へと沈んでゆくのだろうか。

—ああ、また故郷が遠ざかっていく—

私はそう呟き、新居の扉を開けた。